

分野別ベンチマーク

—歴史学—

2002 年

高等教育質保証機構

専門分野別基準

専門分野別基準は、学界のために、特定の学科あるいは専門分野における教育プログラムの特性と特徴を記述するための手段を提供している。同時にこれらの専門分野別基準は、学位授与基準に関する一般的な期待を表し、学位保有者が実証すべき特性と能力を詳しく表現したものである。

この専門分野別基準は、同時に公表された他の基準と共に、**優等学士学位¹**を対象としている。

専門分野別基準は多様な目的のために用いられる。主として、高等教育機関が特定の専門分野において新規のプログラムを設計・開発するにあたり重要な外部情報源として参照される。専門分野別基準は、プログラムに関わる学習成果を明確に表現するための一般的ガイドラインを提供するが、その教科の詳細なカリキュラムを示すものではない。分野別基準は、プログラム設計に多様性と柔軟性を提供し、合意された全体的な枠組みの中での革新性を奨励するものである。

また専門分野別基準は、高等教育機関が学内の質保証を追及する上での支援を提供するものである。合意された一般的な期待に対して、特定のプログラム用に規定された学習成果が達成されたかどうかを検討、評価することを可能にする。

最後に、専門分野別基準は、学術的審査*のために、学生が達成すべき最低限度の水準に関する判断を行うために参照される多くの外部情報源のひとつである。しかしながら、審査官はこの専門分野別基準をこの目的のための初期チェックリストとして使用するのではない。むしろ、審査官が広範囲な物証に基づき包括的判断に到達するための主要なデータとして、また当該プログラムの設計仕様、教育機関自身の内部評価用基準として併用されるべきである。

歴史学科用の学力基準の策定は、それぞれの専門分野を代表して選出された専門家で構成される委員会によって行われた。その作業は高等教育質保証機構（QAA）により監修された。QAAは、この専門分野別基準及び同様の専門家委員会によって開発された他の専門分野別基準を出版し、配布するものである。

この基準は、英国におけるこの分野の優等学位の一般的学力の特徴と基準を明確化するための最初の試みである。

後日、ただし 2003 年 7 月以降に、この分野の進化と基準策定に携わっている機関や学力審査官の体験を反映させて、この基準は改訂されることになっている。QAA は改訂作業を主導し、専門分野学界と協力し、基準の必要な修正を検討、改訂する委員会を設立するであろう。

本基準は高等教育品質保証機構 2000 年版[®]である。

教育機関はその教育目的のためだけに、許可を受けることなく、本基準を複製することができる。リサーチ、私的学習あるいは検討目的であれば、当該学科の専門分野別基準委員会の承認及び QAA の著作権保有を条件に、許可を受けることなく、抜粋を複製することができる。

事前に QAA から書面による同意を得ることなく、基準の電子的保管、適用あるいは翻訳を行うことはできない。

*この場合の学術的審査とは、QAA による品質・基準の第三者保証のための新しい取り決めを指している。この件に関する詳しい情報は QAA の HP 上に掲載されている、*Handbook for Academic Review* で取得できる。

学力基準 — 歴史

序文

初めに

1. 先ず初めに、QAA は基準策定委員会の任務を、「各分野における優等学位を授与するための学力水準、特に最低水準に関する一般的な期待値を表す広範な基準」を策定することと定義した。その後の QAA との協議の結果、歴史委員会では、原則として歴史学科の普通の学生が達成可能な水準を設定する判断基準を提供することに焦点を当てるべきとの合意がなされた。この目的のための判断に使用される付表を提供するが、特定の学生の学力達成に関する判断基準を提供するのは我々の任務ではないと考える。我々は、学術審査官が各学部の提供する水準に関して判断を行うものと仮定する。

2. 我々は、「プログラム」を学位授与に結びつく学科コースを意味する用語として用いる。また、「コース」を学位プログラムの中のモジュールあるいは単位を意味する用語として用いる。我々が対象とするのは優等学位プログラム（レベル H4）を完了する学生の学習に関する基準であり、それ以前及び以降（レベル H1 や H2）の段階を扱うものではない。しかしながら、プログラムに関する基準は、初年度からそれ以降まで、優等学位の取得を目指す全ての段階に該当する。この分野は、単独及び複合優等学位から学際的プログラムにいたるまで非常に広範囲であることを我々は認識している。現段階での我々の主要な関心は、歴史学科における学位授与に結びつく単独優等学位プログラムであるが、我々の助言はより広範囲な分野に関わっている。我々は、共同学位プログラムの認可と審査においては、当該2分野の専門分野別基準の一般的特徴に留意するのが理に適うと考える。QAA がモジュール方式及び学際的プログラム用の学術基準を検討する諮問委員会を設立したことに注目している。この分野における更なる作業が完了するまで、大学及び単科大学の歴史学科に関わる全ての関係者にとって、我々の基準が役に立つことを望んでいる。我々は組織の様式はセクターによって異なることを理解している。我々が学部と言う場合は、組織の形態にかかわらず、歴史学科を指すものとする。

ガイド仮説

3. 歴史は、必要とされる一連の専門知識や選択肢を周辺に持つ中核を識別するのが難しいという点で他の多くの学科とは異なっている。人類の過去に関する知識と理解は、個人及び社会全般の両方にとり計り知れないほど有益であり、歴史教育の第一の目的はこれらを獲得させることである。この分野を構成する膨大な知識を習得させるために学士課程教育が取り組んでいる多様性を我々は認識している。本基準は、そのような技能と質を習得するために知識をどのように用いるべきかに重点を置く。我々の議論はここから開始する。我々の作業全体を通じて、基準の発行に不可欠である全ての事項に触れるべきであるとの信念が貫かれている。言い換えれば、学術審査機関は、ここで対象とする学位プログラムの全ての面に一定の考慮を払うことなく、歴史学科の学力基準に関する判断を行うことはできないとの考え方を我々は取っている。更に、プログラムの枠組みに関する学部基準は、それが教職員及び学生の双方にとって適切に有益であるなら、ここに網羅する全ての領域を網羅する必要があると我々は考える。この基準の最終項では、歴史学科の主要な分野における標準的な学生が習得すべき学力水準の要約を試みている。

4. 我々は自らの任務を以下のように捉えている。

- ・歴史学科の単独優等学位コースにふさわしく、適切であることを判断する基準を策定する。
- ・歴史学科の豊かさと多様性を構築、習得可能にするには、適切な方法が多く存在すると

の原則を損なうことなく、できる限り詳細な方法で策定を行う。

・この分野における新しい学術発展への適応性、コースの構成及び教育方法における革新性に対するニーズを満たすような方法で策定を行う。

教育と学習は進化するプロセスであり、特定のモデルによって歴史学科の教育を凍結させるのが我々の意図ではないことを強く主張する。この専門分野別基準は出発点であるとみなすべきであり、学部や専門学科グループは、規定を追加することによって、あるいは別の選択肢を用いることによって、専門分野別基準がどのように構築できるのかを実証する機会を与えられている。

5. 我々は学問としての歴史の固有の特徴を十分に考慮する。物質的に概念的に、また個別に集合的に生活を組織するための人類の過去の試みからこの学問は構成されており、他の人文・社会科学と歴史を区別するのはこの点であるが、これらの事項の学習目的は、学生の体験を広げ、認識と判断の質を発展させることである。歴史は、過去に対する感覚、異なった価値・制度・社会の発展に関する認識、批判的且つ共感的な個人的姿勢の育成を提供することによって、独特の教育を提供する。歴史の他の学問との互惠的な関係は、この分野の学生の体験に重要な影響を与えることができる。

6. 社会科学の概念・理論・方法は多くの歴史学者によって用いられており、経済史や社会史のコース内だけに限定されるものではないことは明白である。英国には、経済史や社会史学科における学位プログラムの範囲内における、また歴史学科の多くの学位プログラムにおける重要な特性として、歴史の教育及び執筆に関する重要な伝統が長く存在してきた。歴史が社会科学の分野として教えられる場合、学生は1つ以上の社会科学に関する知識習得のためにかなりの時間を費やす必要があることを我々は認識している。一般的に、経済史や社会史だけでなく文化史や政治史を含む、全ての種類の歴史学科の学生は専門分野の適切な概念と理論を習得しなければならない。

7. 特定の種類の技能・質・水準の達成は単独で特定のコース基準あるいは学科に結び付けられているわけではないと我々は確信している。ひとつのプログラムにひとつのモデルがあるわけではないのと同じく、コース基準及び学生の水準達成の間にひとつのモデルや関係が存在するものではない。我々は、歴史学科における機械的な進歩を望まない。技能や質は蓄積的に、反復的に習得されるものである。

8. 良い学士課程歴史教育は様々な形式で提供され、プログラムは極めて多様な教育方法を異なった方法で組み合わせる。この多様性は、個々の学者の異なった興味及び能力、歴史の異なった分野の必要条件、異なった教育機関の学部や専攻グループは異なった教育資源の組み合わせを利用するという事実から発生する。各プログラムは、一般的な信頼性を

得られるような方法で、自らの目標とする成果を規定しなければならない。学部は、その成果を達成するための教育を設計する上で、ピアレビュー、外部審査、QAAの学術審査体系によって提供される専門的な外部審査などを用いて、基準を保証する必要性を認識しなければならない。

9. 評価は教育のプロセスにおいて不可欠の要素であり、効果的な学習における重要な要素である。従って我々は、全ての学部はその学位枠組みの学習成果と一貫している明確な評価方針を開発することを薦める。規定文書には、学生は何を学習しなければならないのか、学習はどのように評価されるのか、その2つの関係性について明確に定義する必要がある。同時に、形成的評価と総括的評価、すなわち進歩に関するフィードバックとして設計された評価と学位授与及び分類目的のための評価、この両者間の関係について注意深く考慮し、説明する必要がある。

10. 重要な能力と知性の質が歴史学の学習全体を通じて習得される。これらは市民としての卒業生に特に大切であり、多くの職業、キャリアにすぐに転用できるものである。大半の人文科学、社会科学分野の学位プログラムによって授けられるという点で、これらの知性の質と能力の一部は包括的である。しかし、歴史学科の学位レベルの学習は、同様に転用可能ではあるものの、専門分野に固有の思考方法も習得させる。これには、歴史的背景や物証への敬意、自分たちの時代まで発展している歴史的プロセスに対するより大きな認識、現行の多様な伝統に対するより深い理解などが含まれる。これら知性の質と能力は、この学科自体の慣習・方法・資料に深く長く集中、関与することによって、最も効果的に、経済的に開発される。従って、転用可能な技能の累積習得やそれを応用するための能力と学生を有能な歴史学者へと育成させることは歩調をあわせて進行する。この2つの間の結び付きは結局、考え方の習慣及び知的アプローチにあり、これは有能な現役の歴史学者として訓練された学生によって習得される。これらの能力は、後の人生で自分の知識を他の事柄に応用する際にも有益となろう。

11. 学生は進歩しなければならず、適切に設計されたプログラムは学生の進歩を促進するのが当然である。歴史学科のプログラムは知識と技能を消極的に吸収するような内容であってはならない。つまり、読解・ディスカッション・文書作成、そして関与・開拓・発見は必須である。しかし我々は、歴史に関する知識の重要性を強調したい。歴史学者の技能と知性の質は、コースにおける歴史的知識の習得・評価・討議というプロセスや歴史学位プログラムが要求する自立した学習を通じて開発される。歴史的知識の特定の内容を規定はしないが、プログラムはそのような知識を授け、学生に更なる学習を奨励する必要がある。歴史学位プログラムの学習成果は、口頭であれ書面であれ、学生の学習の特定の一部という観点で評価されるもので、重要な評価テストはテキストの理解と論拠の整理である。

従って、評価において、アイデアと情報を配置し、概念の把握を示し、論拠を形成する能力を広範囲で多様な歴史的知識を適切に示す能力と切り離すことは難しい。

歴史学専攻者の技能と知性の質

12. 歴史学科の学生は以下の技能と質を強化し、教えるプログラムを履修しなければならない。

i. 過去の常に異なった状況において、どのように人々が存在し、行動し、考えたかを理解する能力。歴史は、過去の他者と遭遇し察知する、見知らぬ構造・文化・思考体系を理解するための学習という異文化ショックが伴う。これらを理解することは、過去が現在に及ぼす影響を解明することでもある。

ii. 専門分野の内容・視点・目的に関連する質問に答える一方、テキストやその他の資料を批判的かつ共感を持って読み、用いる能力。

iii. 状況・出来事・過去の考え方の複雑さや多様性の理解。知的成熟を強化するアンチ還元主義学問としての歴史の特徴にとってこの点の強調は重要である。

iv. 歴史的記録自体に内在する問題の理解：歴史的諸観点に関する認識とそれを取り扱う方法の習得。複雑、曖昧で、矛盾があり、往々にして不完全な資料の解釈に伴う諸問題の理解。知識の限界及び簡単すぎる説明の危険性に対する感覚。

v. 基礎的な批判能力：文献は全て平等の価値を有するものではないことの認識。それらをテストする方法が存在することの理解。歴史学者は、批判的な評価を前提とはするが、知的統合・成熟の構成要素でもある物証法則によって仕事をする。

vi. 知的独立：歴史学科プログラムは単に、また主として、この学科の研究のための準備をすることではないが、リサーチャーとしての一般的な技能、すなわち課題を設定、問題を解決するための能力を組み入れるべきである。これには、文献調査能力、大量の物証を集め、精選、選択、組織、統合する能力、適切な質問を策定し、有効で適切な物証と論拠を用いて答えを提供する能力が含まれる。熟考、つまり歴史学者によってどんな質問がなされるか、それは何故かを含めて、この学科の特性の理解力を育成しなければならない。

vii. 論拠の整理：書面及び口頭で上記記載の技能の全てを提示する能力。そのような論拠は理論構成を有するものとする。すなわち適切で簡潔でなければならない。書面による場合、

明快でわかりやすく、矛盾なく表現されるものとする。口頭の場合、第三者の前で論拠の道理性を維持できる能力、リスニング能力、持続的なディベートに参加する能力、物証や論拠に照らして、必要に応じて観点を修正する能力などが必要とされる。

13. 経済史や社会史など、中には、他の人文科学や社会科学の方法を組み込んでいるプログラムもある。従って、特定のプログラムによっては、他のプログラムでは必須とは考えられない多くの特別の技能が不可欠、望ましいとされるものもある。学部や教育機関は、必要であれば、語学、学習や分析における通信情報技術、数量・計量的手法、考古学的フィールドワーク、公文書に関する学習、歴史が密接な関わりを持つ他の学問に関連する技能など、少なくともこれらのうちひとつの習得を規定するよう薦める。

14. 以下が歴史学科の学習を通じて習得される総合的スキルである。

- i. 自律性
- ii. 自発性
- iii. 独立心、イニシアチブ
- iv. 共同作業能力。第三者の合理的な観点に対する敬意。
- v. 物証、データ、情報を集積、組織、配備する能力。情報を識別、発見、回収、分類、交換する適切な方法に精通している。
- vi. 分析能力、諸問題（複雑な問題を含む）を考慮、解決する能力。
- vii. 口頭による表現の構成、一貫性、明晰さ、流暢性
- viii. 書面による表現の構成、一貫性、明晰さ、流暢性
- ix. 知的統合と成熟
- x. 共感的・想像的洞察力

内容に関する基準

15. セクター全体を通じた歴史教育の特徴は、時代・文化・方法・思考方法の仮説などの多様性である。それでも、多くの中核的な必要条件は特定可能である。以下の 6 項目の必要条件は、コースの特定の組み合わせや特定のプログラム構造を指しているのではない。

16. 時間の奥行き

長期的なタイムスパンにわたる継続と変化に対する意識は歴史学的認識にとって重要である。それが歴史的プロセスの理解に結びつき、過去と現在の並列から発生する洞察への道を開くのである。プログラムは、継続と変化という問題へ学生を導き、過去の時間という長期的な期間にわたる歴史の学習から蓄積される知的恩恵という体験を学生に与えなければならぬ。比較的短期の時代のみを網羅するプログラムは、どのように専門分野に関す

る長期的視点を学生に提供するかを示す必要がある。

17. 地理的範囲

正当な理由により、学生がひとつ以上の社会や文化を学習することが確立された慣習となってきた。何よりも、比較する視点への道が開かれるからである。プログラムが単独の国に重点を置く場合は、他国との真剣な持続した比較を取り入れるべきである。主要な関心が英国にある学生もこの条件の例外ではない。他の国について学習することから発生する客観性の強化は特に重要であり、英国の帝國的過去と現在の多文化国家の意味するところは言うまでもない。文化間、国家の伝統間の理解を促進する歴史の能力は永遠に重要であろう。

18. 当時の資料

学習している時代に由来する原資料について詳細に作業するための機会は必須である。これは書面の場合が多いが、適切であれば芸術品や視覚的物証を含むこともある。学生はそのような当時の資料について批判的作業を豊富に行うべきである。これは「特別学科」コースやその他のコース、独立した学習で行うことができる。多くの場合、学生が行う作業は歴史のリサーチに近似している。大半の学生はリサーチャーとしてのキャリアを希望しているわけではないことを知っているが、この分野の特性を学習する上で文献作業は必要な構成要素であると我々は考えている。

19. 熟考

全ての歴史学科の学生は自らの学問、その社会的合理性、理論的実証、知的根拠について批判的に熟考するよう期待されている。これは歴史学方法論あるいは歴史学の方法という名称のコース、その他のコース、独立した学習で行うことができる。

20. 専門の多様性

歴史は多くの多様性で構成されており、それぞれが明確な焦点と理論的方向性（例えば、経済史、社会史、政治史、文化史、環境史、女性史、ジェンダー史）を有している。学生はこれらの多様なアプローチの中からいくつかに紹介される必要がある。目的は包括性ではなく、多くの選択肢及び探求方法が存在することへの認識をもつことである。プログラムが単独のテーマを扱っている場合は、他のプログラムなどの協力を得て、歴史的な理解のために比較学習が提供されるべきである。

21. 豊富な文書作成

学生は、適切な指導の下、自力で豊富な量の文書を策定、実行、完成させなければならない。大半の場合、これは当時の資料に基づいて行われる。あるいは、特定の歴史的論争や

特定の歴史家の作品に対する批判的評価として、また歴史学方法論の探求という形式をとるかもしれない。それは自立的な場合もあれば、教えられたコースから発生もしくはコースにリンクしている場合もある。文書作成が全く提供されていない場合、学部は別の選択肢を示して、相応の深奥な学習体験を提供しなければならない。

進歩

22. 学生は、通常3年から4年間の連続したコースを取る過程で、主に体験と知識を習得することによって、歴史学位プログラム全体を通じて向上する。それは「実地訓練」という蓄積プロセスである。それぞれ専攻テーマは異なっており、時間が立つにつれて生徒への要求はより厳しく、高度化されてくるが、一般的なプロセスはプログラム全体を通して同様の技能と質を開発、強化するものである。質的進歩は、例えば、思考法の高度化、解釈技能の向上、継続した文書及び/あるいは口頭による分析能力の向上、より自立した学習など多くの方法によって達成可能である。従って、学部は何らかの単独のモデルに準拠する必要はなく、固有のプログラムが3~4年の間にどのように洞察力や必要な能力を習得させ、学力達成をするための手段を提供するように設計されているかを示す必要がある。中には、9学期（あるいは6セメスター）の間、多様な主題で同様の学習を提供し、より大きな能力を育成するプログラムもある。特定の技能と特性を特定のコースに付し、学生がそれを通じてどのように行動するべきかを指示するプログラムもある。プログラムの構造が何であれ、学生はプログラムの終了時点には入学当初よりも高い水準を達成することが要求される。すなわち、学部は、固有のプログラムがこのプロセスをどのように促進するかを示す必要がある。歴史は不連続の学問であるため、ひとつの種類のコースから別のコースへの進行に関する決められた順序はない。固有の教育内容が学生の向上をどのように強化するかを学部が示すことができれば、調査コースが初年度に集中的に行われるべきか、あるいは詳細な文書作成は3年度に学習すべきであるかなどの理由は原則的に存在しない。

教育と学習

23. 学生は、当該コースは何を達成するよう設計されているのか、そのための手段を説明した案内書を各コース別に提供されるものとする。案内書には、コースの構成概要、評価の特性と量に関する情報、参考文献一覧も含めるものとする。これらのコース案内書は、学位枠組み、成績分類の全水準に関する基準、使用される評価の全ての様式、利用可能なコース一覧、コース構成、評価方法と重点項目、盗用に関する助言などを含めた学部案内書と関連付けながら学生が参照できるように設計されなければならない。個別コース及び学部の案内書は共に、可能な限り明確で直接的な形式で利用可能な教育と学習に関する説明が提供されなければならない。

24. プログラムは学生が多様な場面で定期的に教師やその他の学生と公式に接触できる機会を提供するものとする。その目的は、学生のリサーチ能力やコミュニケーション能力を深めることである。これらの取り組みは同時に成功裏に学問の探求を行うために必要な自律心の質の向上をもたらさなければならない。学部内でどのような形式・特徴の機会を提供するかはある程度状況によるであろう。しかし、これらの取り組みは、学位取得のための標準的学習成果と学部における個別コース及び学位プログラムで採用される内容及び教育/評価方法との間の適合性を決定、検討するための学内プランニングを通じて決定される必要がある。教育方法/学習機会は決められたカテゴリーとして扱われるべきではないことに注目するのは重要である。これらは、教師の自己評価、学生によるコース評価アンケート、他の学部や教育機関の良い慣習を取り入れることなどを十分に考慮し、学部による検討対象とすべきである。

25. 学位枠組みには学生の興味を捉え、好奇心を喚起するような講義あるいは講義形式の教育機会が全ての学生に提供されなければならない。講師によるプレゼンテーションは、コースや教科に個人的な印象を残し、学生がそれに基づいて熟考し、個別の固有な解釈に対する反応を示すことを可能にする。講義はコース内容を特定する広範囲な枠組みを提供し、また講義の主要テーマ、ディベート、解釈へと学生を導くことになる。最善の場合、講義は学生が決してあるいはめったに自分で集積できない情報やアイディアに直接触れる機会を与え、その結果、新しい専門テーマの核心への足掛かりとしての役割を果たす。講義は学生のリスニング、選別したメモ取り、熟考する技能を進歩させなければならない。講義は特定の種類のコースにおいていっそう適切であり、コースチームがその最適な配備を決定しなければならない。全てのコースに講義が採用されるべきであると薦めているわけではない。AV や CAL (コンピュータを利用した学習) の使用を含めた、多くの異なった形式で講義の提供が行われることを我々は認識している。

26. 学位プログラムの体系には全ての学生がセミナーやグループ作業などに関与する機会を含まなければならない。これらのセッションでは、学生はグループ討議に参加し、プレゼンテーションを行い、共同でテーマや議論を探求することが期待されている。これらのグループ討議は知識自体の習得よりも学生の理解力向上を目指すべきであり、効果的な学生の参加を最大限にするような方法で構成されなければならない。通常は、所定のリーディング・プログラムがこれらに先行して提供される。そのような学習は、テーマや学科に対する学生の理解力を深め、口頭によるコミュニケーション能力を開発する機会と考えるべきである。歴史に関する討議に対し、自己批判的且つ寛容であると共に、批判的なアプローチを奨励し、学生の自信を築く機会となる。自分の立場で早急に考え、第三者と明瞭に説得的にコミュニケーションをし、第三者と一緒に密接に作業する価値を認識することに加えて、歴史的物証を整理し、歴史的議論を要約する能力を向上させる。

27. 歴史学科の大半の学生の時間は独立した学習、読書、思考、書き物に費やされる。コースの参考文献やその他の読書に関する助言は必要とされる開始時点を学生に提供するが、知識基盤と歴史的アプローチの範囲を拡大するために、図書館やウェブサイトを想像的に使用するよう教師は奨励するべきである。歴史はほとんどテキストに基づいた学問であり、学生は広範な、速い、批判的な読書、上手なメモ取り、議論の消化、情報を速く知的に統合する能力を習得するよう要求される。また、議論を書面にて構築することも要求される。

28. 学生は広範囲な課題（セミナー、グループ・プレゼンテーション、レポート、レビュー、異なった長さのエッセイ、情報通信プロジェクト、論文など）に取り組むよう求められている。そのような課題に取り組むことによって、物証の取り扱い、テーマ/歴史的議論の批判的対処、自分の研究に関して示唆に富んだ説得力ある発表を行う能力に加えて、自分の作文能力及び口頭によるコミュニケーション能力などをいかに向上させるかについて説明を受けるべきである。学生の取り扱いにおける公平さとプログラム全体にわたるバランスの取れた評価には大きな配慮をしなければならないものの、課題はコースの目的と意図された成果にとって適切なものでなければならない。我々は、全てのコースの期間が1学期/semesterでなければならないとの考え方は取らない。一定の種類の歴史学コースは1年を基準に教えた方が効果的な場合もある。その方が望ましいと学術的に判断されれば、このモデルが継続的に取られるべきである。

29. 教育と学習の重要な一環として、全ての学生は自分の進歩に関する批判的、建設的なコメントを受けるべきである。学生の個別の学習に関する適切な議論と反応がなければならない。最低でも、全ての教師は、コースが提供されている期間中は1週間のうち学習の相談を受けられる日（日数）を特定しなければならない。定期的な授業活動の一環として、また学生のレポートに関するフィードバックや不定期な会合などを通じた、教師との個別の出会いは、学生が混乱している分野を明確にし、歴史的なテーマや問題だけでなく自分の成績に関してより良く理解する手助けをするために重要である。

評価

評価における多様性は2つの理由で重要である。第1には、いかなる単独の評価手段を用いても、学生の能力の全てを明らかにすることはありえないからである。第2には、入学時点での学生の教育背景や取得した公式資格がますます多様化しているために、学位プログラムは、自分の知識、理解、能力を示す機会を全ての学生に与えなければならないからである。

学士課程の学力評価は多様である。しかしながら、エッセイは重要な構成要素である。エッセイは、試験形式であるいはコース課題として、特定の質問あるいは問題への反応を書く作業である。エッセイは、学生に多くの技能を組み合わせることを要求する。学生が開発する最上位の統合技能を用いるために、エッセイは、この水準における歴史学科の評価の必須の要素である。単独優等学位プログラムの全ての学生はエッセイを書く能力で相当部分の評価を受けるべきであると助言する。全ての学部は、単独優等学位プログラムの全ての学生に対し、異なった種類のエッセイ（例えば、学識の深さを反映するロングエッセイ、焦点の正確さを必要とするショートエッセイ、異なった歴史的な概念・変化・原因・類似性・違いに焦点を当てたエッセイ、長さを限定したエッセイ、時間を限定したエッセイなど）によって評価される機会を提供することに配慮すべきである。また、学部は、盗用や外部の手助けの不適切な使用に対する対抗手段として、少なくとも数回は試験形式によりエッセイを書くことを学生に要求するよう助言する。これは同時に、プレッシャーの下で、一貫した、合理的な、立証された議論を作成する能力のような生活技能を開発する機会を学生に与えることができる。

32. 全ての単独優等学位プログラムの学生は、一次情報源の理解力、その取り扱い能力に関して何らかの方法で評価されるべきであると助言する。

33. 全ての単独優等学位プログラムの学生は、歴史学的問題に深く対処する能力に関して評価されるべきであると助言する。学生は、歴史学的探求、いくつかの段階を通じてそれを維持、開発するための機会を持たなければならない。そのような体験には、課題設定と問題解決の両方が関与する。これは通常、標準的なコース課題のエッセイに必要とされる少なくとも2倍の長さの集中的な文書作成作業を通じて行われる。

34. 学部は、全ての単独優等学位プログラムの学生が、その他の形式で批判的能力とコミュニケーション能力を評価される機会を与えるべきかどうかを考慮しなければならない。口頭によるコミュニケーション能力の開発は歴史学者の教育において重要であり、実行可能であれば、学生はこの能力を評価される機会を持つべきである。グループに対して発表される正式な論文、セミナー討議における一般発言、セミナー討議の司会あるいは先導、他の人の発言に対する反応などを含めて、口頭によるプレゼンテーションは多様な種類があり得る。

35. 全ての学部は、単独優等学位プログラムの学生はその批判能力、コミュニケーション能力が以下に記載した方法のうちいくつかによって評価される機会を持つよう真剣に考慮するよう助言する。

- i. チーム作業、共同活動：グループプロジェクト、現地調査、物証処理作業など
- ii. 歴史文献検討や報告書など、短い文書作成課題
- iii. 歴史的データに関する質問に答えるため、統計及び/もしくは歴史的データの図解分析を含めて、多様で適切な形式（棒グラフ、パイチャートなど）で発見を提示するための情報技術の使用
- iv. 文献や公文書検索のための情報技術の使用
- v. 公文書資料の使用における実践的な体験

36. 何であれ、ひとつの評価戦略を指示するのは歴史学科基準検討委員会の意図するところではない。成績分類のための基準の設立は各学部、教育機関の仕事である。学習体系が異なれば、異なった評価方式が適切であろうし、それらのプログラムに対する特別の重点や集中にも影響を与えるであろう。学士課程プログラムを適切に評価するために、歴史学科の優等学位は1種類以上の評価方式に基づいて授与されるべきであろう。

評価基準

37. 学部は4段階（1級、2級の上、2級の下、3級）の成績特性を設定し、それを記載した説明書を学生に対し発行しなければならない。これは評価基準を設定するサンプルフォームの形式を取ることができ、そのようなサンプルフォームの例が本基準書の最後に添付されている。異なる評価方式（試験形式でのエッセイ作成、長時間のエッセイ、論文、口頭による能力）が異なった評価を与える場合は、異なったサンプルフォームを作成する必要がある。そのようなサンプルフォームあるいは同等物は学生便覧に記載されなければならない。

38. 歴史学位保有者に求められる質が別の学科の優等学位保有者と異なっている場合は、歴史学科の評価手順は他の学部にとって適切な評価手順と異なるかもしれない。歴史学部、学科、専門教科グループは、当該学科及び本専門分野別基準に適合する成績分類基準を設立するための自治権を有すべきである。分野別基準は、評価方法を決定するためのアプローチ、歴史学に関わる異なった技能・方法・学習成果の評価に用いられる明確な重点項目に関する情報を提供しなければならない。ただし、過度な制限をすべきではない。

39. 出版された基準は、ロングエッセイ、論文、口頭によるプレゼンテーション、これらの評価方法のいずれかあるいは全てが用いられる口頭試験の評価を含めて、評価の全ての形式に利用可能でなければならない。基準は、成績分類の全ての水準において、得点の高い成績を優先しなければならない。但し、1級以下の場合は、学生がより高い級の点数を達成できない制限の種類も示さなければならない。

40. 個別の教育機関は学士課程の達成基準を規定する新しい方法の開発を希望するかもしれない。優等学位（H4）を取得する最低基準は、伝統的な分類制度における第3級を取得するために必要とされる水準を維持しなければならない。この水準以上の成績取得を規定する場合は、分類よりもむしろ成績証明書の発行によって行うことができる。教育機関は、全てのコースあるいはモジュールに対する評価点数と全体的な達成率（加重平均された）を含む成績証明書を発行することができる。そのような手続きを取ることで、様々な学位取得予定者の成績を正しく区別することができ、教育機関は個々の学生が一連の評価の観点からどのような成績を達成したかを示すことができる。卓越した成績の場合は**優秀賞**を授与することができる。優秀賞の候補者は、伝統的な成績分類制度における第1級と同等の全体的水準を達成すべきものとする。

41. 歴史学科の優等学位は通常、それ以前の資格水準終了後最低でも2学年（4セメスター）の学習を必要とする。資格を取得する水準は通常1年間の学習あるいはH1と同等物であろう。

42. 歴史学科の学位保有者は、当該学問分野の能力を実証できなければならない、評価体系の目的は達成された能力のレベルを評価することである。歴史学位プログラムを設立、維持する上で、学部は以下に記載の学習成果概要を考慮すべきである。成績類別においてこれらの学習成果全ての評価を含める必要はない。

- i. 歴史学に関する相当量の知識運用能力
- ii. 適切な質問を策定し、物証を活用して、多様な形式で歴史的議論を発展、維持する能力 [12(vi)・12(vii)]
- iii. 歴史学科のテキストを批判的に文脈に沿って読み、分析し、熟考する能力 [12(ii)・18]
- iv. 過去、問題点や多様な特性を有する歴史的物証を再構築する複雑さの理解 [12(iv)]
- v. 過去を理解、構築、解釈するためのアプローチの多様性の理解。専門分野の場合は、人文史、社会史から派生した概念や理論に関する知識 [7・20]
- vi. 歴史学科のテキストやその他の資料を読み、分析し、熟考する能力 [12(ii)・17・32]
- vii. 新しい情報を発見、回収、選別、交換するために、物証・データを集積、配備する能力 [14(v)・14(vi)・35(iii)・35(iv)・35(v)]
- viii. 異なった国・社会・文化の歴史を比較するための能力を含む、比較的な観点の運用能力 [17]
- ix. 長期的な時間帯にわたる継続と変化に関する認識 [16]
- x. 学問としての歴史の発達と異なった歴史学的方法への認識 [19]
- xi. 持続的で、独自に着想した歴史学的文書を設計、リサーチ、提示する能力 [21・31・

33]

- xii. 当時の資料や進化した二次文献の使用を伴った歴史的問題を深く取り扱う能力 [33]
- xiii. 書面による表現の明確さ、流暢さ、一貫性 [12(vi)・14(vii)・27・28・31・35(ii)]
- xiv. 口頭による表現の明確さ、流暢さ、一貫性 [12(vii)・14(vii)・26・28・34・35]
- xv. 共同作業やグループ・ディスカッションに参加する能力 [26・34・35(i)]
- xvi. 必要に応じて、歴史学的分析と理解の数分野に必要とされる専門的技能 [13・35(iii)・35(iv)]

提言

1. 基準検討委員会は、学位の一部として歴史を学習している全ての学生に対し、以下を提言する。
 - i. この専門分野別基準の12項と13項に記載された技能と知性の質を強化するプログラムを取る。
 - ii. コースと学部に関する包括的な案内書を提供される。
 - iii. 教師と他の学生で構成される多様な形式の教育に定期的に参加する機会を提供される。
 - iv. 教育の重要な一環として、自分の進歩に関する処方的な良いフィードバックを受ける。
2. 基準検討委員会は、単独歴史優等学科の学生に対し、以下を提言する。
 - i. 歴史的時間の長い期間にわたる専門的学習から発生する知的恩恵という実践的体験を与えてくれるプログラムに従う。
 - ii. ひとつ以上の社会あるいは文化の歴史を学習する。
 - iii. 学習している時代によって産出される原資料に関して、集中的で批判的な学習を行う。
 - iv. 自分の学問の特性に関して批判的に熟考することを期待される。
 - v. 多くの異なった歴史のうち数種類に紹介される。
 - vi. 自分の関心を捉え、好奇心を喚起するような講義や講義形式の話聞く機会を提供される。
 - vii. セミナーあるいはグループ作業に従事する。
 - viii. 広範囲な課題を取る。
 - ix. エッセイを書く技能に関して相当部分の評価を受ける。
 - x. 当時の原資料を理解し、取り扱う能力に関して評価を受ける。
 - xi. 歴史的問題を深く取り扱う能力に関して評価を受ける。
3. 基準検討委員会は、全ての学部に対し、単独歴史優等学科の学生に以下を要求するため特別の配慮をするよう提言する。
 - i. 適切な監督の下で、自立して文書を作成する課題（評価の対象となる）を策定、実行、

完成する。

ii. 少なくとも数回は試験形式によりエッセイを書く。

4. また学部は、単独歴史優等学科の学生が以下の点に関して評価される機会を提供するのが望ましい。

i. 多様な形式・分量の文書作成

ii. 口頭によるコミュニケーション

iii. その他の形式のプレゼンテーション

付表 1

時間的制限下で書かれたエッセイによる試験のための評価基準

第 1 級

構成と焦点

- ・ 答えが質問に的確に沿っており、設問のより広い含意について熟慮した理解を示している。
- ・ 答えの構成が明確で、矛盾がなく、書き手の議論の展開に説得力がある。
- ・ 書き手の議論を支持、発展させるために、記述的材料や事実証拠が配置されていて、強力な妥当性と適切な表現で展開されている。

議論と表現の質

- ・ 表現が明確、流暢、正確である。語彙の範囲、言語的慣用句が展開されている事例に適切である。
- ・ 答えは、他の歴史学者のアイディアの効果的な言い換えを十分に超えたものであり、争われている歴史的（該当する場合は、歴史方法学論的）問題の思考方法を駆使できることを実証している。
- ・ 答えは、矛盾のない説得力のある方法で、独自のアイディアを展開し、書き手が独自の思考を展開できる方法で構成されている。

知識の範囲

- ・ 専門分野の知識が広く且つ深い。この場合の知識には、当時の原資料、歴史方法学論、二次文献に関する知識も含まれる。答えに意図されている読解の範囲が広い。

- ・ 答えが、歴史的展開の特性と複雑性に対する明確な感覚を示している。
- ・ 書き手が、一般化と詳細な議論の間を行き来することが可能で、特定化のみならず、統合化することができる。
- ・ 自在に情報の特性と状況を評価することができ、必要であれば、矛盾を特定し、解決を試みている。
- ・ 答えは、取り上げられている時代あるいは複数の時代に関して情報に裏付けられた確実な理解を示している。

第2級の上

構成と焦点

- ・ 設問を理解しており、質問のより広い含意に対しある程度の理解を示しており、真剣に答えようとの試みをしている。
- ・ 答えの構成は、全体を通じて、この分類基準の下位の学生が維持できない水準の分析アプローチを用いて、書き手の議論の明確な展開を促進している。
- ・ 記述的材料や事実証拠は適切に配置されている。この分類基準の下位の学生が展開できない水準で、引用している証拠の意図する全てを用いている。

議論と表現の質

- ・ 文書作成は明確で、一般的な水準で正確であり、歴史学者によって用いられた専門的で高度な語彙の理解を示している。
- ・ 答えは、他の歴史学者のアイデアを用いて、それを超えた展開を試みている。答えは、歴史的説明が試される程度の理解を示している。
- ・ 答えは真の独創性を示してはいないものの、書き手はある程度の知的独立を有したアイデアを提示している。過去とその解釈について熟考する能力を示している。

知識の範囲

- ・ 知識は広範囲であるが均一ではない可能性もある。専門分野の当時の資料、歴史学方法的資料への言及が含まれている。答えによる読解の範囲は相当量である。
- ・ 答えが歴史的展開の特性に関する感覚を示している。
- ・ 書き手は、時として過度の一般化と細部にこだわり過ぎの傾向はあるものの、一般化と詳細な議論の間を行き来できる。
- ・ 書き手、自在に情報の特性と状況を熟考でき、それらを批判的に用いようと試みている。
- ・ 取り上げられている時代あるいは複数の時代に関して確実な理解を示している。

第2級の下

構成と焦点

- ・設問をある程度理解しているが、持続した焦点が欠けており、質問のより広い含意に対する理解が少ない。
- ・答えの構成は、設問に求められているよりも、書き手の自由裁量で資料によって大きく影響を受けている。アイデアは、展開されるというよりも記述されている。
- ・記述的資料や事実証拠は配置されているが、必ずしもこの分類の上位水準が適用されるほど批判的な特徴を有してはいない。

議論と表現の質

- ・記述は、書き手の意図を明確に伝えるために十分正確であるが、流暢さと専門的な歴史学者が用いる学術的語法の駆使が欠けている。時として表現がぎこちない。
- ・答えは歴史学者のアイデアをある程度理解していることを示しているが、批判的な熟考はしていない。歴史学的な説明の問題点は不完全にしか理解していない。
- ・答えはアプローチと議論において独創性を示すことなく、本質的に派生的なアイデアの主張に留まっている。

知識の範囲

- ・知識は相当量あるが、限定的で寄せ集めである。不正確さも多少あるが、基本的な知識はしっかりしている。答えによって意図される読解の範囲は限定的である。
- ・答えは歴史的展開に対する限定的な意識を示している。
- ・書き手は過度に記述的あるいは単なる描写に陥りがちで、設問で要求されている正確な参照なしに知識を示そうとしている。
- ・情報に関しては、状況と重要性を評価する試みがなく、無批判に用いられている。
- ・答えは取り上げられている時代あるいは複数の時代の特性の理解をある程度示している。

第3級

構成と焦点

- ・設問の意味をほとんど理解しておらず、焦点を絞ることなく設問の周囲を記述する傾向がある。
- ・答えは、理論構成されてはいるが展開がなく、議論が不完全で、無計画、統制なく広がっている。
- ・記述的資料と事実証拠は多少配置されているが、その重要性と適切性に関する批判的な熟考が欠けている。

議論と表現の質

- ・記述は、文法的に正しいものの、複雑な歴史学的議論を維持するための高度な語彙と構築に欠けている。時として、記述には明確さと表現の適切性が欠けている。
- ・歴史学的な説明の問題点や試されている特性の理解がほとんどない。
- ・答えはアプローチに意図的な独創性がない。

知識の範囲

- ・設問に対し基本的な答えを形成するための十分な知識はあるが、限定的で寄せ集めである。多少の不正確さはあるが、設問に対して基本的な答えを形成するために十分な知識は存在する。答えは適切な読解を示しているが、特定の範囲内で不足している。
- ・歴史的展開に関する理解はあるものの、未開発であり、歴史学者や他の書き手のアイデアが混同されている、あるいは提示されていない。
- ・議論は存在するが、過度に記述的になる傾向がある。議論は情報に基づいた一般化ではなく、大胆な主張をたどっている。
- ・答えを開始するための十分な情報は存在するが、完全な答えを維持するほどの情報はない。情報は、常に自明であるかのように、無批判に用いられている。
- ・答えは取り上げられている歴史的時代あるいは複数の時代の特性の理解を示してはいるが、初歩的水準である。

付表 2

最低水準

歴史学科の専門分野別基準は、全ての利害関係者のために、単独歴史優等学位の基準に関する一般的な期待値の提供を試みてきた。この基準は、特に、単独歴史優等学位プログラムの内容と進歩、そのようなプログラムが授ける歴史学科に固有の技能、一般的に転用可能な技能、そのような知性の質が評価される手段に関する情報と助言を提供する。同時に、歴史優等学位保有者に期待される能力も示している。

英国で提供されている単独歴史優等学位プログラムの多くの内容は、ある程度一般的な共通の特徴を有してはいるものの、細部では異なっていることを認識している。歴史学位プログラムの固有の内容が多様であることに間違いはないが、全てのプログラムは相当量の歴史学的知識を教授し、歴史優等学位保有者に期待される歴史学に固有の技能及び一般的転用可能な技能を開発するものである。歴史学に固有の技能に含まれるのは、過去の状況・出来事・思考方法及びそれらに関する現存する物証の複雑さと多様性の理解、広範囲な原

資料の解読と分析、批判的且つ文脈に沿った熟考、過去の理解・構築・解釈へのアプローチの多様性の認識、学問としての歴史と異なった歴史学的方法の理解、時間の経過における継続性と変化の認識、歴史学的議論を展開・維持するために物証を集積し、議論を整理して、明確、流暢、矛盾なく表現するための能力などである。優等学位プログラムでは、学生に対し、その他の技能、例えば、言語能力、コンピュータや定量的方法の活用を求め、自立心、自発性、独立心、共感・想像的洞察力、共同作業能力、第三者の合理的な考え方への敬意などを開発することが要求される。

歴史優等学位を優秀な成績で取得した学生は、非常に広範囲で深奥な歴史学の知識、特に過去に関する知識を習得し、上記に記載された歴史学に関わる技能と転用可能な技能のほとんど全てを駆使できることを実証可能であると期待される。標準的あるいは中水準の成績で卒業した学生は、ある程度広範囲で深い歴史学の知識、特に過去に関する知識を習得し、上記に記載された歴史学に関わる技能と転用可能な技能のほとんど全てにおける確かな能力を実証可能であると期待される。歴史学的知識の習得や学科に特有の技能及び転用可能な技能がそれより低い水準である学生は、優等学位を取得して卒業することができず、単独優等学位プログラムの初期の段階で落第するであろう。最低水準で単独歴史優等学科を卒業する学生は、様々なコースあるいはモジュール、評価された学習、学位プログラムにおいて不均一な成績を残したのである。この不均一は、コースやモジュールに与えられた点数の範囲と多様性を検査することによって発見される。中には、最低水準では堅実な成績を残す学生もいるが、それでもなお、最低水準で卒業する学生の大半は、学位プログラムの一部において標準あるいは中水準の学生と同程度の成績を残している。彼らは、十分な歴史学の知識、歴史優等学位取得者に期待される歴史学的技能、転用可能な技能の大部分における必要能力を実証できる可能性があるが、最低水準でしか卒業できない理由は、コースあるいは評価される学習の全体にわたって必要とされる水準を持続的に達成できなかったからである。彼らの成績のほんの一部しか最低水準で評価されなかったものと思われる。しかしながら、この水準において均一な成績を残した学生でさえも、証拠の基本的な理解を示し、未展開で不完全ではあっても、構成された議論を提示し、不十分な分析ではあっても、十分な記述を提示し、多少明確さと流暢さに欠けるとは言え、文法的に正しく、知的な方法で自分の考えを表現したのである。